The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	朝鮮語研究会(李完応会長・伊藤韓堂主幹)の活動と民間団体としての性格
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2010, 36, p. 25-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

朝鮮語研究会（李完応会長・伊藤韓堂主幹）の活動と民間団体としての性格[1)]

植　田　晃　次

본 논문에서는 1920 년대 중기부터 약 10 여년간 조선어 학습 잡지, 교재, 사전의 간행 및 통신교육 등을 왕성하게 벌이면서 일본인의 조선어 학습에 간과할 수 없는 영향을 미쳤던 조선어연구회(이완응 회장, 이토 간도 주간)와 그 활동에 대해서 밝히고자 한다. 지금까지 알려지지 않은 활동 시기와 내용을 밝혀내고 연구회 운영이라는 측면에서 그 성격을 재규명해 본다.

キーワード：朝鮮語教育史，朝鮮語研究会，伊藤韓堂

１．本論文の目的

本論文では，1920年代中頃からの10余年を中心に，朝鮮語の学習雑誌・教材・辞書などの出版や通信教育を精力的に行い，日本人の朝鮮語学習に一定の影響を与えたと思われる朝鮮語研究会（李完応会長・伊藤韓堂主幹）を取り上げ，現存する資料に基づき，研究会の運営という観点から，その性格について再検討する。すなわち，先行研究で朝鮮語学習の奨励・朝鮮語教育の推進を行ったと評価された同研究会の（半）官製団体としての性格を再検討し，本論文ではそれらを研究会の出版物の販売促進・出版物の販路拡大を行ったと捉え直し，同研究会の民間団体としての性格を提示する。また，これまで不明であった時期を含めてその活動の一端を明らかにする。

２．先行研究

２．１　主な先行研究

朝鮮語研究会について，梶井陟は「李完応を会長に、そして伊藤韓堂を主幹に三・一運動後つくられた組織で、一九二四年から『朝鮮文朝鮮語講義録』『月刊雑誌朝鮮語』や数多くの学習書を発行するかたわら、各種講演会、朝鮮語学力認定試験を行なうなど多彩な

1）本論文は第223回朝鮮語研究会（2009年1月10日）での研究発表「朝鮮語研究会とその活動」を骨子としている。また，2008 ～ 2010年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」（課題番号：20320081）（研究代表者：植田晃次，研究分担者：矢野謙一 熊本学園大学教授・呉大煥 島根県立大学准教授，2008年度研究協力者：山田寛人 広島大学等非常勤講師）による成果の一部である。以下，当該科研費による研究会を「科研研究会」と略す。

活動をし、植民地統治下の朝鮮語学習に良くも悪しくも多大な貢献をした。」[2] とその性格を規定している（梶井1980；1984改定：120）。

また，山田寛人は同研究会の発足を『朝鮮文朝鮮語講義録』の刊行と同時（1924年9月）と推測し，「日本人に対する朝鮮語学習の奨励を熱心に繰り広げた団体」で，「1920年代以降、朝鮮における朝鮮語教育を推進する中心的な役割を果たし続けていた」とその性格を規定している（山田2004：201，山田2007a：82-83）。

この他，ホ＝ヂェヨンは「1920年代以降には，総督府の施策で奨励金が支給されたり，研究団体が作られ，日本人のための朝鮮語教育が活性化」したとし，「日本帝国主義による植民地期の朝鮮語奨励政策の延長線上に作られた研究会」と同研究会の性格を把握している（허재영2004ㄱ：3，허재영2004ㄴ[3]：25）。

2．2　先行研究の問題点

2.1で見たように，先行研究では朝鮮語研究会の性格について，朝鮮語学習の奨励および朝鮮語教育の推進を行った（半）官製団体として概ね捉えている。本論文の目的のひとつは先述のように，これを再検討し，研究会の出版物の販売促進・出版物の販路拡大を行った民間団体としての性格を提示することであるが，この点については4章・5章で論ずる。ここではそれに先立ち，先行研究のうち，誤読によると思われる誤った説を述べている허재영(2004ㄱ)・同（2004ㄴ）[4] について，2点を取り上げて検討する。

2．2．1　朝鮮語研究会の名称

허재영(2004ㄱ：2-3)は，先行研究で見たように，朝鮮語研究会について総督府の施策で作られた研究団体とその性格を規定し，次のように述べている。

京城府朝鮮語研究会の公式名称は「朝鮮語研究会」である。この研究会は「京城府」内に設立されたのであるが，周時経先生の後学たちが再建した「朝鮮語研究会（後に朝鮮語学会を経て今日のハングル学会となる)」と区別するために，「京城府」ということばを付け加えた。

また，「朝鮮語研究会規程」第1・2・3・8条を挙げた後，「この規程を通して，京城府朝鮮語研究会は京城府に属した研究会（官製研究会）であったことが確認できる。」とも述べている。

2）日本語文献の引用では，漢字の旧字は新字で表記し，「、」は原文のままとする。朝鮮語文献の引用は，特に必要な場合を除き原文は示さず，本論文の筆者による日本語訳を示す。
3）この文章には執筆者名が明記されていないが，ここでは収録書編者の同氏の著作とした。
4）ホ＝ヂェヨンが編者となり，亦楽から影印・出版された『朝鮮文朝鮮語講義録』や『月刊雑誌朝鮮語』は，当該研究で史料として用いられることが少なくない（例えば최용환 2006)。しかし，同影印本はその底本（本論文の筆者の調査では，建国大学尚虚記念図書館蔵書である。）が不明記であること，底本を忠実に影印に付していないこと，頁の重複等があること他の問題点があり，そのまま史料として用いるには危険である。この詳細については稿を改めて触れたい。

ここでいう「この規程」とは第1条を指すと見られるが，その条項は，「第一条　本会ハ朝鮮語研究会ト称シ本部ヲ京城府ニ置ク」[5] となっている。

この条項にある「京城府」は，行政機関としての京城府ではなく，単に所在地を指すものであると思われる。これは，朝鮮語研究会の活動に行政組織としての京城府の関与が管見の限りでは見られないこととも一致する。すなわち，朝鮮語研究会は「京城府に属した研究会（官製研究会）」とは確認されない。同様に管見の限りでは，同研究会の出版物などで「京城府朝鮮語研究会」と自称している例は見られない[6]。

したがって，ハングル学会の前身である朝鮮語研究会と区別するために，「京城府朝鮮語研究会」という名称を用いていることは，上記条項の誤読に基づくものと思われ，読み手に誤解を与える。たとえば，최경봉(2005：81)や최웅환(2006：47)でも，同様の誤りを継承している。

２．２．２　朝鮮語研究会の「会員」[7]

朝鮮語研究会の「会員」について，허재영(2004ㄱ：4)では，『月刊雑誌朝鮮語』に言及しつつ，「この雑誌に朝鮮語学会会員として文章を出した者は崔鉉培（2回）・李秉岐（3回）・権悳奎（2回）がすべてである。結局，京城府朝鮮語研究会と朝鮮語学会の前身の朝鮮語研究会の間には活発な人的交流はなかったものと思われるが，朝鮮総督府の諺文綴字法改正過程で<u>両研究会の会員</u>の交流があった可能性は非常に高い。これは朝鮮語研究会(朝鮮語学会）会員中，一部は諺文綴字法改正過程で朝鮮総督府の嘱託として働いたという点を考慮する時，自ずと推論できる。」としている(허재영2004ㄴ：27にも同様の記述がある。下線は本論文の筆者による。)。

ところで，「朝鮮語研究会規程」[8] は第5条で「本会ノ会員タラントスル者ハ何時ニテモ入会スル事ヲ得（入会金不要)」，第6条で「本会会員ハ会費トシテ毎月金七拾銭ノ会費ヲ前納シ此ニ対スル第三条所定ノ講義録ノ配布ヲ受クルモノトス」，第３条で，「本会ハ（中略）毎月一回朝鮮文朝鮮語講義録ヲ発行シ会員ニ頒ツモノトス」と規定している。この他，「会員ハ講義録ノ配布ヲ受ケ講演会、談話会、講習会等ニ出席スルヲ得」（第10条[9]），「講義録中ニ疑義アルトキハ何時ニテモ自由ニ質問スルコトヲ得」（第11条）と規定されている。

さらに,「朝鮮語講義録の終刊と月刊雑誌『朝鮮語』の発刊」（1925年9月付）[10] では,「而

5)『朝鮮文朝鮮語講義録』第１回第２号，ソウル大学中央図書館蔵書Y36/2/1(1)

6) 内表紙等に「京城　朝鮮語研究会」等と書かれている場合は,京城と朝鮮語研究会の間に空白があるか，京城が小さい活字で印刷されており，京城は所在地であることがわかる。

7) 植田（2009a）の3.2参照。오대환(2009)の3章2.1等にはこれが引き写され文章化された記述がある（この箇所については出典の明示なし)。そのため，読者が参照しがたいレジュメは学術論文での引用になじまないが挙げる。なお，当該研究会に同氏は出席していなかった。

8)『朝鮮文朝鮮語講義録』第1回第2号，ソウル大学中央図書館蔵書Y36/2/1(1)

9) 第1回第1号では，本来「講義科目ノ大要」を示した第9条末につくべき「但講師ノ都合ニヨリ変更スルコトアルベシ」が誤って第10条の末尾に入れられている。ここで言う「講師」は第9条に言う「講義科目」の執筆者であるが，山田（2009:144）では，これを第10条にいう「講演会、談話会、講習会等」の講師と読み誤ったと思われ，誤植された文面がそのまま示されている。なお,『朝鮮文朝鮮語講義録』第1回（ソウル大学中央図書館蔵書Y36/2/1(1)所収）の同規程では,第2号からは誤植が訂正されている。

10)『朝鮮文朝鮮語講義録』第1回第12号カ，ソウル大学中央図書館蔵書Y36/2/1(1)

も熱心なる会員の数は、発起人等が嘗て想像したる数の幾倍かに達し、講義録としては類を見ざる数版累刊の盛況を呈したる如きは、(後略)」と述べている。

これらの記述から見て,「会員」についていえば,会費を前納した者が随時会員と見なされ,『朝鮮文朝鮮語講義録』が配布・頒布される人々を指すことになる。すなわち허재영(2004ㄱ)が「両研究会の会員」という表現でいうような,執筆者を含めた団体・組織の構成員という意味合いではなく,「『朝鮮文朝鮮語講義録』の定期購読者」という程度の意味合いにすぎないのである。

3．朝鮮語研究会の運営者[11)]

ここでは,朝鮮語研究会の運営者という観点から以下述べる。ただし,新たに明らかになった1944年の朝鮮語研究会の運営については,6章で扱う。

3．1　伊藤卯三郎（伊藤韓堂）

朝鮮語研究会の主幹を務める。森川清人・越智兵一（1935：1176-1177）[12)] によれば,原籍は福岡市薬院であり,その経歴をまとめれば以下の通りである。

1905年6月　朝鮮に渡る[13)]。鎮南浦私立保英学校で朝鮮語を学ぶ。

1910年4月　鎮南浦新聞社入社。諺文附録編輯主任。

1912年　「一身上ノ事情」で退社。

1915年2月　朝鮮新聞社入社。諺文版編輯主任。

1919年3月　京城日報社に転ずる。

1921年4月　毎日申報社入社。編輯長。

1924年7月　退社,朝鮮語普及･奨励にあたる。

1926年4月　朝鮮思想通信社創立。

生年は不詳であるが,おそらく19世紀末の福岡に生まれた伊藤は,朝鮮半島に渡り,保英学校で学んだ朝鮮語の能力を生かしてジャーナリズム界で頭角を現し,1924年以降,「朝鮮語普及・奨励」に従事しつつ,朝鮮思想通信社長[14)] を務める等ジャーナリズム界でも続けて活動した人物といえよう。4.2.2.1で後述の1937年2月24日発行の『内鮮共用書翰文』(鮮于日 編著,朝鮮語研究会）には,1937年１月付で伊藤韓堂の名での「謝辞」があり,また発行兼編輯人としても名が見られる。しかし,それ以降,『改訂中等学校朝鮮語教科書』や『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書』が版を重ねる際に,「編輯兼発行人」として名が出るが編著書は見られず,その後の活動や没年は不明である。

11）植田（2009a）の3.1参照。오대환(2009)の3章2.2.1等にはこれを引き写し文章化した記述がある。

12）本書の存在については,三ツ井崇氏（同志社大学）のご教示を得た。その後,同書に伊藤卯三郎に関する記述があることに気づき「科研研究会」で資料を紹介し,後日,第5回科研研究会（2008年10月25・26日）で発表した。なお,山田（2009：146-147）にもそこでの知見に基づいたと見られる同書からの引用がある。

13）原文では「渡鮮」。

14）伊藤韓堂（1927）での肩書による。

この間，後述の朝鮮語研究会の各種出版物の他，朝鮮語を扱ったものではないが，伊藤韓堂「三人寄れば七つの団体」(『朝鮮統治問題論文集 第一集』[15]（250頁）や，韓堂「国境横断旅行記（大正八年）から」・同「しこくさ」他（伊藤卯三郎 編輯（1927)『朝鮮及朝鮮民族 第一集』朝鮮思想通信社，25・375頁）といった朝鮮にまつわる囲み記事類を掲載している。また,伊藤韓堂「極東を中心としての日露貿易」(近藤義晴(著作者)(1927)『新露西亜観』露西亜通信社,225-234頁）のような,直接には朝鮮に関らない文章も残している。

なお，ホ＝ヂェヨンは,以下のように伊藤を創氏改名した朝鮮人と見なしている。

이 글에서 필자는 伊藤韓堂君을 ‘仁兄은扶安人이오愚弟는勤土民이라’라고 한 점으로 볼 때 이등은 창씨개명 결과로 쓰인 성으로 보인다.(この文章で筆者は伊藤韓堂を「仁兄は扶安人であり，愚弟は勤土民なり」と言った点から見る時，伊藤は創氏改名の結果，用いられた姓と思われる。）（허재영2004ㄴ：45）

ところが，当該の記事の当該部分は以下の通りである。

仁兄은扶桑人이오、愚弟는槿土民이라、(仁兄は扶桑人であり，愚弟は槿土民なり）（崔永年1925：114[16]）

「仁兄」は伊藤韓堂を指し，「扶桑人」，即ち日本人とされている[17]。すなわち上に示したホ=ヂェヨンの記述は，資料を誤読した上で事実を歪曲したものである。

3．2　李完応

朝鮮語研究会の会長を務める。前掲『朝鮮及朝鮮民族 第一集』の「本集寄稿家諸氏略歴」によれば，経歴は以下の通りである[18]。

1905年　官立漢城高等学校出身。

1906年　翻訳官となる。

1910年　外国語学校教諭に転じ，以降10有5年京城高普教諭。

1925年　退官し，朝鮮語研究会会長。

生没年について，金敏洙（1986；2008[2]）では，「1887～未詳」としているが，南廣祐(1987)によれば，1887年11月3日生まれ，1949年9月23日永眠という。

15）学習院大学東洋文化研究所友邦文庫蔵書yuho317-48

16）『월간잡지朝鮮語』1（1)，亦楽影印本。ここでは記述の元となったと思われるものに依るため，影印本を用いて検証した。

17）ホ＝ヂェヨンのこの誤読については，「科研研究会」において，矢野謙一氏・呉大煥氏・山田寛人氏と共同で確認したものである。

18）南廣祐（1987）では1906年3月，官立漢城中学校卒業，官立京城第一高等普通学校で13年間教鞭を執ったとされる。なお，南廣祐（1987）の存在については，呉大煥氏の教示を得た。また，金敏洙（1986；2008[2]）によれば，京城高等普通学校では朝鮮語教員であったという。より詳細な経歴は山田（2007a：77）にある。

「大韓帝国の学制による新教育」（金敏洙1986；2008[2]）を受けた李完応は，翻訳官を経て教職に就き，高等普通学校等で朝鮮語教員を務める傍ら，日本人への朝鮮語教育に従事した人物である。この間，日本人対象の『朝鮮語発音及文法』や朝鮮人対象の『中等教科朝鮮語文典』を始めとし，後述の朝鮮語研究会の各種出版物等に，多くの教材・教科書類がある。また，舩岡献治 編纂『鮮訳国語大辞典』の校閲者として，金沢庄三郎･小倉進平･林圭・玄檍らと名を連ねている（舩岡 編纂1919：内表紙）他、1918年1月には朝鮮総督府編纂『朝鮮語辞典』の審査委員の１人となっている（小田1920：2)。さらに，「朝鮮の学務当局は何故朝鮮語科を度外視するか」が前掲『朝鮮及朝鮮民族 第一集』に朝鮮語研究会長の肩書で収められている。

３．３　その他

３．３．１　趙岡熙

伊藤・李完応の他，運営に携わった人物として，趙岡熙という人物が判明している。彼は「会長　李完応，主幹　伊藤韓堂」と連名で「総務」として登場する人物である（「朝鮮語講義録の終刊と月刊雑誌『朝鮮語』の発刊」1925年9月付[19]）。

前掲『朝鮮及朝鮮民族 第一集』の「本集寄稿家諸氏略歴」（374頁）によれば，「大正九年善隣商業卒業後、毎日申報、東亜日報記者、時代日報社会部長等を経、本紙創刊と共に入社郷里忠南青陽、年三十。」という経歴である。朝鮮語研究会の出版物では，『月刊雑誌朝鮮語』第3号[20]に時代日報政治部長の肩書で「朝鮮人の命名法」が掲載されている。また，前掲『朝鮮及朝鮮民族 第一集』に朝鮮思想通信記者の肩書で「意志の人･実行の人李圭完」を寄せている。

３．３．２　一記者・編輯部

学習院大学東洋文化研究所蔵の『朝鮮文朝鮮語講義録』上巻の綴り表紙の表２には,「本講義録に執筆の講師諸氏」として8人（「上段　李完応氏・西村真太郎氏・小倉進平氏、中段　魚允迪氏・呉一相氏、下段　崔永年氏・中村健太郎氏・洪承耆氏（가나다順)。」）の写真が貼り付けられている。しかし，同講義録の上巻・中巻・下巻の本文には，呉一相・崔永年の名は執筆者としては見られない[21]。このことから，彼らは「一記者」･「編輯部」名義で掲載された記事類の一部の執筆者に該当する可能性がある。

４．朝鮮語研究会の諸事業[22]

４．１　朝鮮語研究会規程にみる事業内容

「朝鮮語研究会規程」について，ここでは同研究会の事業の概括のため，それと関連す

19）『朝鮮文朝鮮語講義録』第1回第12号カ，ソウル大学中央図書館蔵書Y36/2/1(1)
20）1925年12月10日；1926年3月10日第2版，大阪府立中央図書館蔵書。
21）崔永年については,『月刊雑誌朝鮮語』に崔永年(1925)がある。
22）植田（2009a）の4および資料2～4参照。오대환(2009)の4章1.4～2.1等にはこれを引き写し文章化した記述がある。

る部分の大要のみ述べる。

まず会の目的について，朝鮮文朝鮮語の研究並びに其の普及（第2条）とし，内鮮融和に資するため講義録を発行（第3条）すると規程している。具体的には，講義録の発行・会員への配布・修業試験の実施（第3条・第12条），講演会・講習会・談話会の開催（第3条），会員からの講義中の疑義への回答（第10条），作文･翻訳文･諺文習字，其の他の添削･批評（第11条）が謳われている。また，規程にはないが，4.2.2で見るように，李完応『朝鮮語発音及文法』等を始めとし，主に『朝鮮文朝鮮語講義録』の連載記事等をもとにした図書の出版・販売も行う。このほか，4.2.3で述べるように，他の機関・団体の編纂・発行図書の販売も行ってもいた。

４．２　出版物の刊行と販売

４．２．１　通信教育

朝鮮語の通信教育としては，『韓語独習通信誌』第1編（大韓起業調査局東京出張所発行，1904年）等がありはしたものの，本格的なものとしては，朝鮮語研究会の『朝鮮文朝鮮語講義録』･『月刊雑誌朝鮮語』･『中等朝鮮語講座』が嚆矢であったと思われる。ここではその内容には踏み込まず，図1でそれぞれの刊行期間（開始・終了年月）を示すにとどめる。

講義録1回　1924.9---1925.9
朝鮮語　1925.10----------1929.1
講義録2回　1926.10---1927.9
講義録3回　1927.10---1928.9
中等　1931.6----1933.11

図1　朝鮮語研究会の通信教育雑誌の発行期間

４．２．２　研究会発行の図書

ここでは以下，図書の販売について，現物を確認できたものとそうでないものに分けて述べる。韓国発行の影印本の場合，註4で指摘したように，その底本の所在が明らかにされていないといった根本的な問題点の他，書込みの恣意的な消去など故意による改竄や，意図しない落丁・重複がしばしば見られる。また，いわゆる「デジタルライブラリー」等についても，現物を確認しようがないという点で資料の信憑性が疑われる場合がなくはない。そのため，ここでいう「現物」とは，原則として書籍・雑誌の実物を実見できたものを指す。ただし，現物を未見のものの一部については，デジタル化されたものあるいは影印本を補助的なものとして，利用せざるを得なかった。それについては注記する。

4.2.2.1 現物が確認できたもの

基本的に現物が確認できた朝鮮語研究会の出版物を表１に示す。

〔注記〕

(1)「編著者」欄の「李」・「伊藤」は李完応・伊藤韓堂,「研究会」は朝鮮語研究会の略。

(2) 雑誌については，第1号と最終号の刊行年月日を挙げた。『月刊雑誌朝鮮語』と『朝鮮文朝鮮語講義録』第1回・第2回については，山田（2007a：82-83）に依った。

(3)『朝鮮文朝鮮語講義録』の「合本」については，奥付の書名を採った。

(4)「(版)」が未記載のものは初版を表す。

(5)「典拠」欄が空欄のものは,その版の現物により確認したことを表す。また,数字と「奥」とあるものは，その本の当該版次の奥付の記述により確認したことを表す。

(6)典拠欄の「＊」は歴代韓国文法大系の第2版（博而精）によるものである。

編著者	発行日(版)	書　　名	典拠
	1924年		
	9月−1925年9月	朝鮮文朝鮮語講義録1(1)-1(12)（発行日不詳）	
	1925年		
	10月11日− 1929年1月10日	月刊雑誌朝鮮語1-40(発行日は奥付による。表紙右上と裏表紙では10月13日)	
	1926年		
李	4月3日	朝鮮語発音及文法	
	10月- 1927年9月	朝鮮文朝鮮語講義録2(1)-2(12)（発行日不詳）	
	1927年		
李・伊藤	5月12日	朝鮮語第三種受験者必携	
	10月1日− 1928年9月1日	朝鮮文朝鮮語講義録3(1)-3(12)	
	1928年		
李・伊藤	1月1日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	1月1日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	1月1日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥
李・伊藤	1月1日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	3月10日	『朝鮮文朝鮮語講義録』合本（個人蔵）	
李・伊藤	3月10日	中等学校朝鮮語教科書 上巻	2奥
研究会	3月10日	改訂中等学校朝鮮語教科書 下巻	6奥
李・伊藤	5月10日(2版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	5月10日(2版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	5月10日(2版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥

李・伊藤	5月10日（2版）	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
李・伊藤	11月25日(3版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	11月25日(3版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	11月25日(3版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥
李・伊藤	11月25日(3版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	1929年		
李完応	1月23日	中等教科朝鮮語文典(デジタル)	2奥
研究会 編輯部	2月7日	日鮮単語対訳集	
李・伊藤	2月20日	中等学校朝鮮語教科書 下巻	
李・伊藤	6月17日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	
李・伊藤	6月17日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	
李・伊藤	6月17日	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	
李・伊藤	7月4日(4版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	7月4日(4版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	7月4日(4版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥
李・伊藤	7月4日（4版）	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
李・伊藤	9月30日(5版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	9月30日(5版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	9月30日(5版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥
李・伊藤	9月30日(5版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	1930年		
研究会	3月15日	鮮和新辞典	
研究会	3月20日(再版)	鮮和新辞典	4奥
研究会	3月25日(3版)	鮮和新辞典	4奥
研究会	4月1日(4版)	鮮和新辞典	
研究会	6月8日	朝鮮語試験問題並訳文集（第一集）	
李・伊藤	6月20日(6版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	6月20日(6版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	6月20日(6版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	1931年		
李・伊藤	1月27日(7版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	1月27日(7版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	1月27日(7版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
研究会	1月28日(2版)	改訂中等学校朝鮮語教科書 下巻	6奥

李・伊藤	2月3日(2版)	中等学校朝鮮語教科書 上巻	
	6月15日−1933年11月8日	中等朝鮮語講座　1-9（デジタル）	
	1932年		
李完応	3月28日(2版)	中等教科朝鮮語文典（デジタル）	
研究会	3月28日(3版)	改訂中等学校朝鮮語教科書 下巻	6奥
李・伊藤	4月3日(8版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	4月3日(8版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	4月3日(8版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	9月5日	『朝鮮文朝鮮語講義録合本』（建国大学・明治大学）	
李・伊藤	11月20日(9版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	11月20日(9版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11･16奥
李・伊藤	11月20日(9版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	1933年		
李・伊藤	6月25日(6版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥
李・伊藤	10月30日(10版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	11奥
李・伊藤	11月25日(10版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	11月25日(10版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇(11版奥付では発行日を10月30日とする)	16奥
李・伊藤	11月25日(10版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
研究会	12月13日	普通学校朝鮮語読本巻一訳解	
	1934年		
李・伊藤	6月4日(11版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇(16版奥付では発行日を11月24日とする)	
李・伊藤	6月4日(7版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	7･11奥
研究会	10月18日	わかり易い朝鮮語会話	
李・伊藤	11月24日(11版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	11月24日(11版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	16奥
李・伊藤	11月24日(11版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	1935年		
研究会	4月15日(改定4版)	改訂中等学校朝鮮語教科書 下巻	6奥
李・伊藤	5月15日(8版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	11奥
	9月4日	朝鮮文朝鮮語講義録合本（大阪大学・富山大学・富山大学梶井文庫(上欠)・早稲田大学・大阪府立中央図書館(上中欠)）	
研究会	12月13日(5版)	改訂中等学校朝鮮語教科書 下巻(改訂5版カ)	6奥

沈宜麟	12月15日	中等学校朝鮮語文法	＊
李・伊藤	12月25日(12版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	12月25日(12版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	16奥
李・伊藤	12月25日(12版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
研究会	1935年発行カ	昭和五年度より同十年度までの朝鮮語試験問題集(デジタル／奥付欠)	
	1936年		
	5月4日	朝鮮文朝鮮語講義録（富山大学梶井文庫）	
李・伊藤	6月4日(13版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	16奥
李・伊藤	6月4日(9版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	11奥
李・伊藤	10月18日(13版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
李・伊藤	10月18日(13版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
	1937年		
鮮于日	2月24日	内鮮共用書翰文集	
研究会	3月23日(6版)	改訂中等学校朝鮮語教科書 下巻(改訂6版カ)	6奥
李・伊藤	8月10日(14版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	16奥
李・伊藤	8月10日(10版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	11奥
李・伊藤	8月10日(14版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
李・伊藤	10月20日(14版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
	1940年		
李・伊藤	12月15日(15版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	16奥
李・伊藤	12月20日(15版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	16奥
	1941年		
李・伊藤	3月31日(15版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	16奥
李・伊藤	11月10日(16版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 附録	
	1942年		
李・伊藤	1月30日(11版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 下篇	
李・伊藤	3月15日(16版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 中篇	
李・伊藤	4月18日(16版)	一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇	
	1944年		
崔常寿	7月25日	科学小話	
豊野実[23]	9月15日	女の学校（デジタル）	

表1　現物が確認できた朝鮮語研究会の出版物

これらは朝鮮語奨励試験受験用などの教科書類が大半ではあるが，一部，朝鮮人用・日本人用教材もある。

23）豊野実については，6で論ずる。

また，1937年夏以降は1942年4月まで，朝鮮語関係のものとして，『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書』の各篇の重版が見られるだけであるが，表1や6章で述べるように1944年には突如として読み物的な出版物を刊行していることがわかる。

4.2.2.2 現物が確認できないもの

以下，広告等には掲載されているが，現物を確認できなかったものについて述べる。

まず，朝鮮語研究会編纂・発行（1930；1930[4]）『鮮和新辞典』所収の広告によれば，以下の2冊が存在していたと思われる。同広告により，その内容を示す。

『鉄道専用朝鮮語自習書』

朝鮮語研究会 編　ポケット型　全1冊　280頁　0.80円

本書は鉄道従業員の自習用又は教科用として編纂したるものにして、上編に諺文の発音法及基礎会話を収め以て初学者自習の便を図り、下編には朝鮮総督府鉄道従業員養成所の『英語教科書　鉄道会話』の全篇に亘り朝鮮語の対訳を加へたるものを載せ、尚附録には朝鮮の各駅名、名勝、古蹟並に交通上の単語を蒐め臨時の応用に便ならしめたり。

『朝鮮語逓信会話』

朝鮮語研究会 編　ポケット型　全1冊　200余頁　0.80円

逓信吏員に朝鮮語の必要なるは他の諸官庁従業者の比にあらざれども、今日まで適当なる教科書なきを遺憾とし、今回本会にてこれが編纂を為せり、(ママ)上編には諺文々法一般を説き、下編には逓信吏員として必須の用語を以て会話数十章を編み、専らその職務執行の用を為さんことを期せり。

次に豊野実（1944）には，以下が挙げられている。

新刊　朝鮮語研究会編『内鮮新辞典』[24)]　3.00円

新刊　朝鮮語研究会編『最新鮮和辞典』　5.00円

近刊　豊野実『朝鮮神話伝説集』

近刊　豊野実『朝鮮古蹟と伝説』

近刊　豊野実『朝鮮の民俗』

また，鮮于日（1937）『内鮮共用書翰文集』（朝鮮語研究会）には，以下が挙げられている。

『師範教育朝鮮語対話』　1冊　0.70円

24）建国大学尚虚記念図書館には，同館ウェブサイトの検索によれば，本書と見られる조선어연구회（1944）『内鮮新辞典』民衆時論社（登録番号：E0002516）が所蔵されるが，2008年12月29日に行った調査の際には紛失されており，現物が確認できなかった。

25）『中等朝鮮語講座』第8号巻末の広告には，「総督府にて、昭和五年度より改定諺文綴字法により編纂せられたる、普通学校朝鮮語読本巻三に正確なる訳文を加へ、且綴字法を詳細に解説して新旧の相違点を理解せしむる目的の下に、特に総督府の許可を得て発行したる本書を、既刊の左記（植田註：巻一・巻二の訳解）に引続き斯学研究の士に奨む。」という宣伝文句が見える。

『普通学校朝鮮語読本巻二訳解』・『普通学校朝鮮語読本巻三訳解』[25]・『普通学校朝鮮語読本巻四訳解』・『普通学校朝鮮語読本巻五訳解』（6は近く刊行）　各1冊　各0.50円

『中等学校朝鮮語文法（改定綴字）』　1冊　0.80円

『中等学校朝鮮語文法（在来綴字）』　1冊　1.00円

『改定諺文綴字法概要』　1冊　0.10円

さらに，『中等朝鮮語講座』第1回第1号巻末には，以下が挙げられている。

『尋常小学国語読本訳解』〔巻一より巻四まで〕　0.60円

これらのうち，とりわけ価格が示されたり，「残品僅少」と付記された「『尋常小学国語読本訳解』〔巻一より巻四まで〕」については，実際に出版された可能性が高いと思われる。

4．2．3　他の機関・団体等編纂・発行の図書の販売

朝鮮語研究会は自ら刊行した図書・雑誌の他，他の機関・団体等が編纂・発行したものも「販売所」として取り扱っていたようである。

例えば，朝鮮語研究会編纂（1930;1930[4]）『鮮和新辞典』（朝鮮語研究会）の巻末広告には，朝鮮史学会編纂の『朝鮮史大系』他４冊が，李完応・伊藤韓堂（1929）『中等学校朝鮮語教科書　下巻』（朝鮮語研究会）の巻末広告には，朝鮮総督府編纂の『朝鮮語辞典』が掲載されているが,それぞれ「販売所」として朝鮮語研究会の名（と前者では振替口座番号）が示されている。その他，「販売所」の記載がない広告のものについても，販売に携わっていた可能性がある。

5．朝鮮語研究会の性格の再検討

5．1　周辺事業から見た性格

2章で見たように，허재영（2004ㄱ：2-3）では，朝鮮語研究会の性質を「京城府に属した研究会（官製研究会）」と評価している。

しかし、これまで検討した活動の内実を見れば，「研究会」と名乗ってはいるものの，研究を旨とする団体ではなく，ある種の出版社と捉えて見るほうが同研究会の実態をより反映している。

さらに，主幹である伊藤卯三郎（韓堂）が創立した朝鮮思想通信社が発行し，伊藤が発行兼編輯人となっている前掲『朝鮮及朝鮮民族 第一集』を見てみよう。同書は「凡例」で,「世界の大勢と朝鮮の将来」（宋鎮禹），「朝鮮民族政治運動の一般的趨勢」（李灌鎔）について，「二論文は内検閲の際前文削除を命ぜられ」，このほか，閔泰瑗・趙奎洙の論文については，「中間に於いて十数頁削除を命ぜられ殆んど骨抜きとなつた」と述べている。このことから，朝鮮思想通信社と密接な関係を持つ朝鮮語研究会が必ずしも総督府の傘下の団体であったとは言いがたい。

5.2 経営から見た性格

5.2.1 経営状態

また,『朝鮮文朝鮮語講義録』は，第1回～第3回まで3次に渡って発行されたが，その第1回（1924年9月−1925年9月）分と見られるもので早くも，未納会費の督促が2回見られる。「下」[26] 所収の雑纂のうち「最近施行された第一種試験の問題と其の訳文」（20-25頁）の25頁下半分の「会費未納の会員に愬へ申候」に「本講義録は、会則に明記しある如く、前金にあらざれば送本せざる事になつてをりますが、御互の便宜上、身分、職業の明かな方々に対しては、そのまま送本して来ました。然るに第一号以来の会費を、未だ一銭も納入しない方がある為に、会の台所は火の車です。（中略）僅な金のことですから……」と朝鮮語研究会の名で依頼記事がでている。さらに金燾鎮「수수께기　朝鮮の謎と其の解釈（二）」（5-10頁）の10頁左下には「急告」として「数ヶ月分の会費未納の方に対しては已むを得ず集金郵便を発しました。何うか御支拂ひを願ひます。／十四年二月　日／朝鮮語研究会／敬白」とある。同研究会が総督府の傘下団体であるとすれば，相応の金銭的支援があると思われる。しかしながら，このような会費納入についての悲痛な依頼を見るに，当初から経営への金銭的支援は無かったのではないかと判断される。また，そうであったとすれば，会費の未回収に5.2.2で見る雑誌等の出版の実情・販売の実績等を合わせ見て判断して，経営の見通しについても甘いものであったと思われる。

5.2.2 雑誌等の出版の実情と販売の実績[27]

ここで朝鮮語研究会の雑誌刊行の実情について見てみよう。

李完応は『朝鮮文朝鮮語講義録』の刊行状況について，리완응(1925)で，「昨夜ようやく講義録が納本されたという。此度の第12号は第1回の完結であるにより，諸般の整理によって聊か遅れた」（9月9日付）と述べている。また，その4日後には，「印刷所の製本の遅延によって，今朝やっと講義録の発送が終わった」（9月13日付）と書いている。

第1回の第12号は1925年9月発行であるが，ここにあるように，第1回の完結段階で当月発行分がその月の8日夜に納本され，13日に発送されるという状況であり，いわば「自転車操業」状態であったことがわかる。

また,『朝鮮文朝鮮語講義録』の合本について見れば，本論文の筆者の調査では，現在9種が確認されている。一般に、奥付に記された書誌事項が同一ならば、それらは同一の内容を持つことが当然視される傾向があるが，これらの異本については，実見調査の結果，同一の奥付を持つものですら，異本ごとに内容が異なることが判明している（植田2009b：99)。これは「合本」がその時々のありあわせの「バラ」（各号の単冊）を基に適宜作成・販売されたため[28] と推測される。

26）『朝鮮文朝鮮語講義録』，ソウル大学中央図書館蔵書Y36/2/1(2)
27）植田（2009a）4.2参照。
28）この観点は「科研研究会」での討議によって得たものである。なお,『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本については，稿を改めて論じる。

さらに『中等朝鮮語講座』についても，安定しない発行の様子が伺える。同誌は第9号までしか現存が確認できず，同号で廃刊となったとされ，各号の発行年月から「毎月の刊行が困難だったらし」いとされる（山田2009：150）。各号の発行について日まで示したものが表２である。

発行年月日	回・号	発行年月日	回・号
1931年6月15日	第1回第1号	1932年10月13日	第6号
1931年8月1日	第2号	1933年2月22日	第7号
1931年9月15日	第3号	1933年6月25日	第8号
1931年12月15日	第4号	1933年11月8日	第9号
1932年5月10日	第5号		

＊韓国・国立中央図書館蔵書（デジタル版）の奥付により作成

表2 『中等朝鮮語講座』の号別発行年月日

興味深いことに，奥付を見ると，1号では「毎月十五日発行」，2号以降では「毎月一日発行」と書き続けるが，「第二号編纂の後に」で早くも「初号より毎月十五日発行の予定の所、今月は種々の都合から約半月遅延したのは真に申訳のないことであるが、今後毎月一日発行に変更して刊行して行きたいと思ふ。」とある。しかし，実際には表2で示したように，刊行は大幅にずれ込む。また表紙の号数が1号のみ「第一回第一号」とあるが，2号以降は「第一回」が省かれており，当初第2回以降も視野に入れて刊行され始めたが，早々に困難に逢着したため回表示を削除したとも考えられるかもしれない。また，9号は目次数も極端に少なくなっており，先細りの様子が見て取れる。

従来『朝鮮文朝鮮語講義録』について，総督府や朝鮮語奨励試験との関連が深いと指摘され（たとえば山田2004：201），「朝鮮総督府の支援を受けて機関誌を発刊し」（최경봉2005：81）というような指摘すらあった。しかし，以上で検討したように，総督府の深い関与の下にあった（半）官製団体というよりは，資金繰りに苦労しながら，総督府にも執筆人材を求めて「自転車操業」で出版物の刊行・販売を中心とした活動を行う民間団体という姿が浮かび上がる。言い換えれば，朝鮮語奨励試験を利用して出版物の販売を試みたが，その試みは失敗に終わった民間団体と見るのが妥当である。

６．朝鮮語研究会と民俗学者・崔常寿（豊野実）[29)]

６．１　崔常寿(豊野実)の著書と経歴

６．１．１　著書

従来朝鮮語研究会の終焉に関しては，「同会の存続期間は不明であるが、上記の変遷（植田註：同会発行の刊行物の出版状況）から少なくとも1937年2月までは存続していたことがわかる。」（山田2009：143）とされ，それ以降は不明であるとされていた。しかし，

29）植田（2009a）の3.1.3参照。오대환（2009）の3章2.2.1と4章2等にはこれを引き写し文章化した記述がある。

1944年には朝鮮語研究会から，「一般の少年少女と正規の学業を受けられなかった方々」（序）を対象に過去に雑誌に掲載した科学に関する話が朝鮮語で書かれた崔常壽（1944）と，「女学生」等の手紙を編集し，日本語で書かれた豊野実（1944）の2冊が刊行されている。

6．1．2　経歴

豊野実（1944）「著者略歴」では彼の経歴を次のように記載している。

豊野実（旧名　崔常寿）

釜山府明倫町生れ。雑誌記者、新聞記者、女学校の英語科教員等を経て、現在　朝鮮語研究会理事長。民間伝説研究に専念。

「朝鮮神話伝説集」「朝鮮の伝説」「朝鮮民俗記」「現代童謡・民謡選」「科学小話」等の著書あり。

また，森川 編著(1944)は「はしがき」で「尚本書に收むるものは、雑誌京城ローカル（後、京城と改題）に掲載したるものゝ一部を無雑作に編輯したるものである」と述べ，豊野実によるものとして「伝説　車泉と裴処女」(57-63頁)・「伝説　論山弥勒仏の来歴」(276-279頁)[30] を収録している。なお，これらの文末の肩書はともに「「筆者、伝説研究家」」である。

次に韓国の著名な民俗学者・崔常寿の経歴を見る。

崔常壽(1988)の著者略歴では，「1918年生まれ。夙に日本帝国主義の植民地時期から朝鮮民俗学の開拓者の1人であり，権威者である。（中略）／解放前には多年間，女学校で英語教師の職を歴任し，解放後には韓国外国語大学・京畿大学・慶熙大学・梨花女子大学教授・非常勤講師の職を歴任した。」，また，國語國文學編纂委員會 編(2002:2909)では「1918 ～。民俗学者。慶尚南道釜山（出生）。号は石泉。1937年，日本の大阪外国語学校卒業。1947年，韓国民俗学会を創立)」[31] とされている。この経歴の重なりから見れば，この朝鮮語研究会から2冊の著書を刊行した崔常寿（豊野実）は民俗学者の崔常寿と同一人物であると判断される。

ところで，崔常寿(1958)の「まえがき」には，日本の植民地支配からの朝鮮の「解放後」(凡例によれば1947年）に公刊した『朝鮮口碑伝説誌』の前書きの一部を再引用した以下の記述がある。

その後，私は学びの道を求め，故郷を後にし，その学びの程度につれ，ソウルへ，日本へと転々と逆旅の生活をしたのだが，（中略）/（中略）戊寅年（植田註：1938年）8月の夏

30）目次では275-と誤記されている

31）(株)サラト編集(2000)により，大阪外国語学校の英語部第1回～第20回（1925 ～ 1943年卒），大阪外事専門学校の英米科第21回～第22回（1944 ～ 1946年卒)、および他の語部の1943年卒業者までについて悉皆調査の結果，豊野実，崔常寿もしくはそれらしい姓名は見出せなかった。卒業はしていない，もしくは同窓会に加入していないということも考えられる。

休みの時，日本のいわゆる「皇国臣民ノ誓詞」抹消事件によって東莱警察署に囚われの身となるや，私の民俗学資料の採集原稿およびその他が押収され，燃やされてしまったことは私の夢にも痛憤に思う所である。

6．1．3　「2つの」朝鮮語研究会と崔常寿（豊野実）

2冊の奥付を見ると，朝鮮語研究会の住所が「京城府中区太平通一丁目二十九番地」，電話が「本局四五六二番」（「本局②四五六二番」），振替が「京城七六六」となっている。これは現在までに現物を確認しえた朝鮮語研究会の出版物で最も近い1942年4月18日付で第16版が発行された（初版は1928年1月1日発行），李完応・伊藤韓堂『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上巻』の奥付に見られる伊藤韓堂の住所（朝鮮語研究会の住所も「京城府太平通一丁目朝鮮通信社内」），朝鮮語研究会の電話・振替に一致していることから，両者が同名の異なる団体ではなく，同一の団体であると見て差し障りない。

先に見たように，豊野実（2004）の「著者略歴」では，崔常寿は「朝鮮語研究会理事長」とされているが，6.1.2で見たような経歴も持つとされる彼と研究会が如何につながりを持つに到ったのかは明らかではない。しかし，1942年4月の段階で朝鮮語学習書を刊行した朝鮮語研究会は，1944年の段階では直接的には朝鮮語とは関係のない活動を細々と行っていたことが明らかになった。なお，朝鮮語研究会と密接な関係を持つ朝鮮通信社について，「2325号（1933.12.26）までの発行が確認できる」（山田2009：147）といわれているが，豊野実（1994）の韓国・国立中央図書館蔵書は刊行直後の1944年9月20日付で，朝鮮総督府図書館に「朝鮮通信社寄贈本」として受け入れられていることから，同通信社もまたなんらかの形で当時存在していたと見られる。

6．2　1944年の朝鮮語研究会の運営に携わった人々

前述の1944年に朝鮮語研究会から刊行された2冊の本には，伊藤たつ・伊泉伍重という名も見られる。

伊藤たつについては，豊野実（1944）『女の学校』の発行者として，奥付に名前が見られる。併記された住所は「京城府太平通一丁目二九」である。これが4章で挙げた朝鮮語研究会の出版物で最も近い1942年4月18日発行の『一日一時間一年卒業警察官朝鮮語教科書 上篇』（16版）の奥付に見られる伊藤韓堂の住所に一致しているとともに伊藤姓であることから，その家族・親族ではないかと推測される。

伊泉伍重については，崔常寿（1944）『科学小話』の著作兼発行者として，奥付に名前が見られる。併記された住所は「京城府東大門区昌信町三二三」である。著作兼発行者という肩書から，同研究会の運営に何らかの関与があった人物と推測されるが，詳細は不明である。

７．おわりに

以上、朝鮮語研究会の活動について概観し，現存する資料に基づき，これまで不明であった時期を含めてその活動の一端を明らかにするとともに，研究会の運営という観点から，その性格についても再検討した。

同研究会の性格については，先行研究で下された，総督府の深い関与の下で，朝鮮語学習の奨励・朝鮮語教育の推進を行った（半）官製団体であるという従来の評価と異なり，朝鮮語奨励試験を利用して出版物の販売促進・出版物の販路拡大を試みた民間団体であるという評価を提示した。

また，1937年8月以降の朝鮮語研究会は，朝鮮語関係の既刊書の限られた重版を細々と行っていた。そして，当時の出版物には編輯兼発行人として，少なくとも1942年までは伊藤韓堂の名が見られる。しかし，1944年には同じ住所で突如として読み物的な出版物を刊行しているが，伊藤韓堂の名は見られなくなる。このことから，1944年の段階に至ってもおそらくそれまでの朝鮮語研究会と関係のある朝鮮語研究会という団体が，民俗学者の崔常寿が関わる形で，存在していたことが確認された。

とはいえ，ある時期から伊藤韓堂・李完応といった中心的人物の動静が途絶えるなど不明な点も未だ残っている。また，広告等で書名が知られているのみのものを始めとする未発見資料の発掘も今後の課題となる。

さらには朝鮮語研究会が刊行した個々の出版物の分析等により，伊藤韓堂や李完応に代表される人々がどのような契機・要因によって朝鮮語研究会の活動に携わっていたのかという点を明らかにすること，また，他の諸団体やマス・メディア等が朝鮮語研究会をどのように捉えられていたのかという点を解明することが今後の課題として挙げられよう。

＜参考文献＞

伊藤卯三郎 編輯（1927）『朝鮮及朝鮮民族 第一輯』朝鮮思想通信社

伊藤韓堂（1927）「本書の刊行について」伊藤卯三郎 編輯『朝鮮及朝鮮民族 第一集』朝鮮思想通信社

植田晃次 研究代表者（2007）『日本近現代朝鮮語教育史』2005 ～ 2006年度科学研究費補助金基盤研究(B)「日本における朝鮮語教育史の総合的･実証的研究」研究成果報告書

植田晃次（2009a）「朝鮮語研究会とその活動」第223回朝鮮語研究会（2009年1月10日）発表レジュメ

植田晃次（2009b）「「講義録」という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程」『第一回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム予稿集』延辺大学外国語学院・延辺大学日本学研究所

小田幹治郎（1920）「朝鮮語辞典編纂の経緯」朝鮮総督府『朝鮮語辞典』大阪屋号書店 特約売捌（1920年12月5日発行）

梶井陟（1980：1984改定）『朝鮮語を考える』龍溪書舎
近藤義晴(著作者)（1927）『新露西亜観』露西亜通信社
(株)サラト編集(2000)『咲耶会（同窓会）会員名簿』大阪外国語大学咲耶会（同窓会）
末松保和 編（1970）『朝鮮研究文献目録　単行書篇(下)』(東洋学文献センター叢刊第9輯)
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター
末松保和（1980）『朝鮮研究文献目録　単行書篇』(東洋学文献センター叢刊影印版5）汲古書院
豊野実（1944）『女の学校』朝鮮語研究会（韓国・国立中央図書館／デジタル版）
舩岡献治 編纂（1919）『鮮訳国語大辞典』大阪屋号書店
森川清人・越智兵一（1935）『朝鮮総督府始政二十五周年　記念表彰者名鑑』表彰者名鑑刊行会（芳賀登 他 編集（2001）『日本人物情報大系』79，皓星社）
森川清人 編著(1944)『朝鮮　野談・随筆・伝説』京城ローカル社
山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版
山田寛人 執筆（2007a）「朝鮮語研究会の活動」植田晃次 研究代表者（2007）所収
山田寛人 執筆（2007b）「朝鮮語学習書目録（1880 ～ 1945年)」植田晃次 研究代表者（2007）所収
山田寛人（2009）「『朝鮮文朝鮮語講義録』発行の背景－朝鮮語学習に対する需要の変遷－」『北東アジア研究』17，島根県立大学北東アジア地域研究センター

國語國文學編纂委員會 編(2002)“國語國文學資料辭典（下卷)”한국사전연구사
金敏洙（1986；2008²）「1 40　李完応「中等教科　朝鮮語文典」解説」金敏洙・高永根編“第2版歴代韓國文法大系　第1部第16册”박이정
南廣祐(1987)「李完応著　中等教科朝鮮語文典影印에 부쳐」“中等教科朝鮮語文典 全”朝鮮語研究会（影印）
리완응(1925)‘나의일긔중에서’“월간잡지朝鮮語”1(1)
오대환(2009)‘식민지 시기 일본인을 위한 조선어교육 연구-'조선어 장려 정책'과 '경성 조선어 연구회'를 중심으로-연세대학교 대학원 국어국문학과 박사 학위논문(심사위원장：서상규，심사위원：김하수・강현화・강승혜・조항록)
최경봉(2005)“우리말의 탄생”책과함께
崔常壽(1944)“科學小話”朝鮮語研究會
崔常壽(1958)“韓國民間傳說集”通文館
崔常壽(1988)“韓國의 美－歲時風俗”瑞文堂
崔永年(1925)‘伊藤韓堂君에게’허재영(2004)“월간잡지朝鮮語”1（1）역락
최웅환(2006)‘『朝鮮語發音及文法』의‘문법’편과『(中等教科) 朝鮮語文典』’“문학과 언어”문학과 언어학회

허재영(2004ㄱ)‘일제 강점기 조선어 장려 정책과 경성부 조선어연구회’
“朝鮮文 朝鮮語 講義錄 上”亦樂
허재영(2004ㄴ)‘일제 강점기 일본인을 대상으로 한 조선어(한국어)교육’
“朝鮮文 朝鮮語 講義錄 上”亦樂

＊ 本稿を為すにあたって，関係各図書館のご配慮を賜った。感謝いたします。
＊ 匿名の査読者2名からそれぞれ有益なコメントを賜り，それを反映させた個所がある。
＊ 註1に示した発表に基づき本稿を準備している過程で，初稿脱稿（2009年9月30日）直前の9月27日に韓国・国立中央図書館の所蔵資料検索により，오대환（2009）の存在を知った。

（付記）

初校校正後，植田（2009b）の詳細が，下記論文として公刊された。

植田晃次（2009）「「講義録」という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程」『延辺大学学報（社会科学版）』第42巻増刊，延辺大学学報編輯部